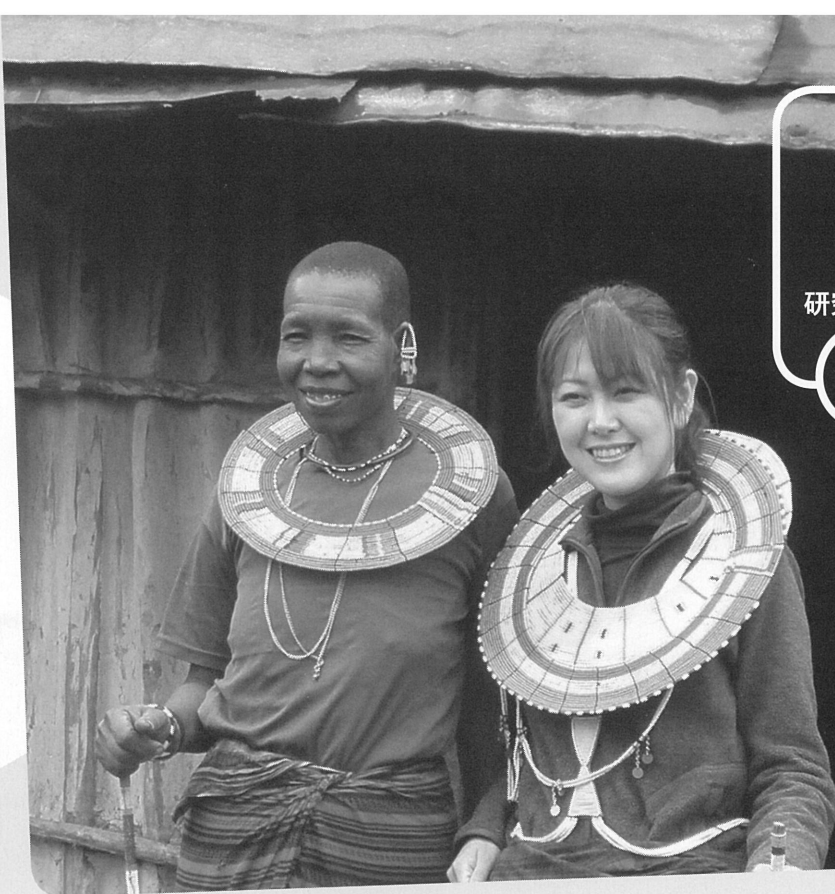


## タンザニアの コミュニティ・ ツーリズムを通じた 女性の社会的自立

なかしま まみ  
中嶋 真美  
玉川大学文学部比較文化学科教授



マサイ女性と飾りをつけて記念写真

タンザニアにおける  
コミュニティ・ツーリズム

国際的動向として「持続可能性」の重要性がうたわれて久しい。観光分野においても世界各地で持続可能な観光への取り組みが見られ、その一つにコミュニティ・ツーリズム（CBT: Community-Based Tourism）がある。

CBTはコミュニティ（地域社会）を観光資源かつ主要アクターと捉え実施する観光形態だが、途上国では住民参加型開発の一手法として実施されることが多い。タンザニアのエコツーリズムは豊かな自然と野生生物を鑑賞するサファリツアーに注目が集まりがちだが、地域（住民と社会）に裨益することを目指したCBTの数が年々増加している。またサファリツアーの合間に、現地の暮らしや人々との交流が楽しめる日帰りツアーとしても人気がある。

タンザニア政府は観光分野の国家政策として「高品質観光」の推進を掲げ、貧困削減と地域の持続可能な発展の両立を目指してきた。具体的な取り組みとして、1996年にオランダの開発援助団体（SNV）との協働事業「Tanzania Cultural Tourism Program」をスタート。当初3か所だったCBTサイトは現在48か所にもなり、その規模は拡大傾向にある。プログラムの運営方法や利益還元の方法等は各サイトに任ざれており、初等教育や医療施設の改善といった地域のニーズを反映した利益の活用が可能となっている。



女性グループ活動

CBTと  
女性の  
社会参加

国や地域の別を問わず、サービス産業分野での女性労働の必要性は高い。とりわけCBTでは

は食事作りやお茶の提供といった家庭的労働、または土産物製作等の家内作業が不可欠であるため、地域内の女性の存在は重要な意味を持つ。農作業と観光の繁忙期が重複する場合の労働力確保のため、女性グループを組織し運営するサイトも多い。

女性グループは観光專業の場合もあれば、他の目的をもって組織される場合もある。生産や販売に関わる小規模事業を通じ、観光客という新たな市場を開拓することで、その利益を元手に新しい事業を展開し社会的自立を図るケースも見られる。近年では、数多くある類似プログラムとの差別化を図るため、女性主導であることをツアーの特徴として展開するプログラムも増えてきた。

一方で、女性のCBTへの関与には文化的な問題もある。CBTを実施する農村部では家族単位で農作業を行い、生産物販売のため都市部に出

るのは女性の仕事である。また女性は家事労働全般を担うという文化性があるため、労働負担は男性のそれに比べ明らかに多い。CBTという対人サービスの増加は、結果として女性の過剰な労働負担となるため、積極的にCBT事業に関与する余裕や機会を得ることが難しいという事情も存在する。

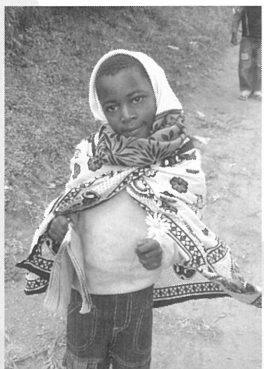
### 今後の展望と課題

サイト数が増え発展的に見えるCBTだが、プログラムを実施すれば必ず雇用創出等による収入増加が見込める、というものではない。あくまで地域発展の下支えとして機能するケースがほとんどであり、個人のレベルでの効果は極めて限定的である。また近年、類似プログラムが急激に増加し、近隣サイトとの競合による収益低下に悩む地域もある。各サイトの観光客数の減少は女性の就労・所得向上の機会を奪うだけでなく、CBTが地域社会の発展や社会的自立への手法として機能しなくなる危険性も孕む。

今後、地域の持続可能な発展、そして女性の社会的自立を目指す上では、近隣サイトと協働は不可欠である。競合相手としてではなく地域単位でのパートナーとして、アトラクションの差別化や相互連携等も検討

することで、互助的な関係に基づいた発展を目指すのではないだろうか。

子どもと交流@ギレン村



お土産販売@ギレン村